

2004年 大阪医科大学(現:大阪医科薬科大学)医学部 卒業
 2004年 大阪医科大学医学部附属病院研修医
 2006年 大阪医科大学医学部附属病院消化器内科
 レジデント
 2007年 北摂総合病院消化器内科医員
 2008年 大阪医科大学医学部附属病院消化器内科
 ティーチングアシスタント
 2010年 愛知県がんセンター中央病院消化器内科部
 レジデント
 2012年 大阪医科大学 第二内科 助教
 2016年 大阪医科大学 第二内科 講師
 2019年 大阪医科大学 先端医学開発講座 特任准教授
 2020年 大阪医科大学 第二内科 准教授
 2022年 大阪医科薬科大学 消化器内視鏡センター 准教授
 2023年 大阪医科薬科大学 消化器内視鏡センター 教授
 2025年 大阪医科薬科大学 膵胆道高度医療センター
 センター長

所属:日本内科学会(認定内科医、総合内科専門医)、日本消化器内視鏡学会(専門医、指導医、本部評議員、近畿支部評議員、近畿支部幹事、Interventional EUS用語検討委員、内視鏡的胆道ドレナージ評価基準作成委員、Walled-off necrosis(WON)ガイドライン作成委員、学会賞選考小委員会委員)、日本消化器病学会(専門医、指導医、本部評議員、近畿支部評議員、アジアとの国際連携推進委員)、日本臨床腫瘍学会(がん治療認定医)、日本胆道学会(胆道内視鏡治療指導医、評議員)、日本膵臓学会(膵炎治療・内視鏡治療指導医、評議員)、日本超音波医学会、アジア・オセアニア内視鏡学会内視鏡医育成事業インストラクター



大阪医科薬科大学 消化器内視鏡センター 教授
 膵胆道高度医療センター センター長

小倉 健先生
 Takeshi Ogura ,MD,PhD

世界が認める胆膵内視鏡技術 すべての患者に届く 医療を目指す消化器内科の プロフェッショナル

年間胆膵疾患の入院患者数は1000名以上に達し、胆膵内視鏡検査(ERCP)は年間1500例以上実施するなど、国内トップクラスの症例数を誇る大阪医科薬科大学の消化器内視鏡センター。

この胆膵グループを率いる小倉健先生に、圧倒的な症例数を支える体制づくりや、国内外から評価される手技の背景について話を伺った。さらに、胆膵疾患の早期発見に向けた取り組みについても紹介する。

消化器内科の『集大成』

人の人生に関わることができる職業に憧れていたという小倉先生。医師を志すようになったのは、高校生の頃だった。

「医師の方と関わる機会があったのですが、その先生が私たち家族にとっても親身に接してくださって、私も医師になりたいと思いました。そしてその先生からも、医者は責任は重いけれど、患者さんが喜ぶ姿を見られたり、最期まで寄り添えたりと、

他にはない職業であることを教えてもらいました」

自分も患者の人生に関わりたい。患者の悩みやご家族の葛藤を受け止め、最善の医療を提供したい。その想いは、消化器内科を選択した理由にもつながっている。

「私が研修医になった2004年は、日本でスーパーローテーション制度が始まった年でした。さまざまな科を回る中で、自分の手で患者さんを治したいという気持ちを強く感じ、直接治療ができる消化器内科を選びました。当時は胃や大腸に進む医師が多く、手技も複雑で患者の予後も悪いとされる胆膵領域は、ニッチな分野として見られていました」

だからこそ小倉先生には「なんとかしたい」という強い想いが芽生えたという。

「胆膵領域は内視鏡だけでなく、CTやMRIの読影、エコーも含めて対応する必要があります。消化器内科の手技の集大成だと思っています。その領域を極めて、患者さんに少しでも貢献したいと考え、胆膵領域に

足を踏み入れました」

世界が認めた内視鏡技術

2023年に開催された「EUS Skyline」は、世界22か国が参加し、各国の施設から胆膵系手術のライブ配信を行うという、ヨーロッパ内視鏡学会主催のイベントである。世界トップランナーの内視鏡医が集うこの舞台に、小倉先生は日本から唯一招聘され、超音波内視鏡下ドレナージ術のライブ配信を行った。

「それまでも海外で内視鏡のライブ配信を行った経験はありましたが、説明をしながら手術を行うのはやはり難しさがあります。さらに当院では初の試みでもあり、実際に手術を行う患者さんのご理解を得るところから始まり、麻酔科の先生への依頼や、病院長・理事長への承認など、準備段階から大変でした。配信した映像は当院のYouTubeチャンネルにも掲載されていますが、それを見て来院される患者さんもいらっしゃるのです、少しでも患者さんに貢献できればと思っています」

で共有しておくことが最も重要です。チーム全員が同じ景色を見ていれば、想定外のことが起きてもすぐに対応できます。私たちは患者さんの人生を預かる立場ですので、その患者さんにとって最も安全で最も適した方法を常に考える必要があります。そのため大切なのがコミュニケーションです。若手医師も多いので、自分の考えに固執せず、意見を聞いて理解するようにしています。今は連絡手段も発達しているので、気軽に発言できる環境づくりも意識しています」

また、技術習得の根底にあるのは徹底した自己研鑽である。「今でも欠かさず行っているのは、画像を見ながら手技のイメージトレーニングをすることです。また、うまくいった症例だけでなく、うまくいかなかった症例の動画を見て、その原因を振り返り、検証することを意識しています。さらに、『通常はこの手技を用いるが、別のアプローチの方が良いのではないか』と常に疑問を持ち、より良いアウトカムにつながるよう努めています」

こうした日々の積み重ねが、技術の土台となっている。では、優れた内視鏡医に共通する資質とは何だろうか。

「いろいろな先生の手技を見ていると、やはり器用だなと感じる場面は多いです。そして、もちろん器用さも大事な要素ではあるのですが、一番重要なのは状況判断能力だと思っ

「一人ひとりの患者さんに対して複数のプランを想定し、チーム全員を強調する。」

「一人ひとりの患者さんに対して複数のプランを想定し、チーム全員を強調する。」

地域とつながる胆膵医療の 新たなカタチ

2023年6月、小倉先生を中心に「OMPU-Earthプロジェクト」と「胆膵フレックスライン」がスタートした。

OMPU-Earthプロジェクトは、膵がんのリスクが高い患者を早期に発見し、治療につなげる取り組みである。各医療機関では、消化器内視鏡センターが考案した「EARTHカード」を活用し、リスク因子のスコアに応じて専門医への紹介を行う。「現在、消化器内科の入院患者さんの三分の二は胆膵疾患で、非常に多

い状況です。当院で紹介される患者さんの多くは進行がんでしたが、過去の画像を見返すと、当時見落とされていた前がん病変が確認できるケースも少なくありません。こうした背景から、リスクのある患者さんに早期に検査を行い、できるだけ早く膵がんを見つけないという思いで立ち上げました。また、今後は高槻市とも連携し、行政の協力を得ながら早期発見・早期治療につなげていきます」

そして、胆膵フレックスラインは、地域の医療機関から大阪医科薬科大学の胆膵専門医へ直接相談ができる専用回線である。

「胆膵領域の専門医は非常に少ないため、患者さんがどこに住んでいても、同じレベルの診断や治療方針の説明が受けられるように開設しました。特に専門医がいなくリニック

からの相談が多く、紹介につながるケースも増えています。先生方からの『助かった』という声も多く、非常に大きな需要を感じています」

こうした取り組みは院内でも評価され、2025年の膵胆道高度医療センターの設立へとつながった。小倉先生が見据えるのは、場所に依存しない医療の実現である。

「大阪医科薬科大学だから受けられる医療」ではなく、どこにいても同じような医療が受けられる社会を目指しています。そのためには遠隔医療の充実や若手医師の育成、手技の標準化が重要です。胆膵領域は専門性が高く、現状では限られた医師しか対応できませんが、今後需要は確実に増えていきます。特に膵がんは2030年にはがん死亡原因の3位になると予測されており、この領域の医療体制の整備は急務だと感じています」

そして今後は研究面での進展も期待されている。

「世界中どこでも同じように治療ができるよう、デバイスや手技の開発が進んでいくと思います。超音波内視鏡では、これまで外科が担ってきたバイパスに相当する治療を内視鏡で行う時代が来つつあります。また、iPS細胞による臓器再生やAIの活用など、この分野は加速度的に進展していくでしょう。高度な技術だからこそ、患者さんに還元できた時の喜びは大きいので、胆膵領域を志す医師が増えてほしいです」



膵胆道高度医療センター